

親愛なるアジアへ——どこかでお会いしたことがありますか？

河野晴子

空中に浮かぶ白く大きな風船。飛び去ってしまわぬよう、若い男性がその手で糸を握っていることで、風船はかろうじて空中を漂っている。彼は自分が握っているものに対していささか無頓着な様子で、風船のことを除けばごくありふれた週末の朝、緑が青々と茂る公園に立っている。次に若い家族が、そしてまた次に幸せそうなカップルが、全く同じような行動をとる。絶えず空に向かう機会をねらって風船がその手からあちこち動くのにかまわず、彼らはそこに立って自分たちのことにかまけている。時おり風船がくるくると回り、そのたびに風船の裏側にある、迷彩柄に印された大きな疑問符が露になる。軍隊色のオリヴの色調は青空には明らかに不釣合いで、その結果として視覚的な矛盾、すなわちそれが隠されたシンボルであり、偽装するから目立つのだということを、その疑問符に吹き込んでいる。

このビデオ作品は、どこかでお会いしたことがありますか？本展「Have We Met?」に寄せる筆者のコメントに適切な方向性を与えてくれている。4名のアジアのキュレーターがそれぞれの国から14名のアーティストを招待して行う共同作業である本展もまた、最終的な答えを提示しようとしないうちに、心地良い浮遊感を持つものとも言えよう。むしろ、われわれはこれから対話を始めるためにひとつの問いを放とうとしているところなのだ。アートが集うこの遊び場の中に足を踏み入れる人々の中に、その問いが穏やかに着地することができるならば、それはより一層深い会話に膨らむかもしれない。本展は個人がそれぞれに好きなことをしている週末の公園にもどこか似ているかもしれない（そもそも良き出会いがあれば、ここで過ごした時間はさらに有意義なものになるだろう）。これがどこに向かうのかについては不確かだが、展覧会にはそれでも向かう先があるはずである。つまり、われわれのメッセージはこの場を超えて、考えられるあらゆる境界線を超えて、カジュアルに伝えられるほど十分に軽やかなものなのだ。そして他の展覧会と同様、この展覧会にもまた、しかるべき終わり方があるだろう。理想的には、問い自体とそれが孕む疑念が形がないまでにしほむその時まで、展覧会は終焉の彼方へと消え去ってくればよい。

ここで関係している多くの人に「どこかでお会いしたことがありますか？」という問いかけをするということは、展覧会が始まる数ヶ月前に執筆している今この時点では、やや皮肉なことだ。「まだ、これから」というのが差しあたった答えだろう。というのも、キュレーターたちでさえ、互いを介した直接的ではない紹介でのみ「会った」参加アーティストもいるぐらいなのである。一方、観客はこれから出会う作品についてあまり情報を持ち合わせていないだろう。というのも、われわれは意図的に、発表経験の少ない若いアーティストを選んだからである。また、キュレーターたちは、思い描いたプランに従ってその作品同士が互いに呼応し合うかどうか、今のところ想像に委ねるほかないのだ。

実際正直なところ、キュレーターたちが再会する時、それがわれわれの間でも十分に妥当な問いになるのではないかと私は思っている。なぜならわれわれのこれまでの打ち合わせはいつも真剣でありながら簡潔で、カジュアルだけれど完全に仕事モードだったからだ。一台のバンに窮屈に同乗し、クラクションをがなり立てるリキシャだらけの真夏のデリーから、候補者のポスターが点在する選挙間近のジャカルタの街並みを通り過ぎ、最終的にはバンコクのひどい渋滞にはまった旅路の思い出は、われわれが再び展覧会が開催される冬の東京で集う頃には、ある程度薄れているだろう。キュレーターたちの脳裏で共通する和音を鳴らすに至った一握りのアーティストが浮上した後、われわれはそれぞれの故郷に戻り、自分たちが発見したものをいかに展覧会として作り上げるかについてさらなる対話を再開したが、それはEメール——驚くべき利便さではあるが、顔と顔をつき合わせて接触するまでにはどうしても至らないツール——を通してだけであった。われわれは、新たな再会にあたって「どこかで（本当に）会ったことがある？」と互いに問いかけるかもしれない。

それはつまり、「Have We Met?」というこの問いは簡潔で、なおかつ適度な恥じらいを含んでいるため

に、見知らぬ人たちの間で、そしてまた一度知り合った者同士の間でも、好奇心に満ちた接触から絆を再確認するに至るまで、さまざまなアプローチを反映しながら使うことができるということだ。さらに解釈の幅を拡げれば、その問いはアジアという、より大きな文脈に向けても有効であるように思える。地理的、文化的な共通性を包含しながら、皮肉にも西欧の共通語で一体となっているアジアを、見慣れた他人の集合体と見ることもできれば、見知らぬ隣人同士ということもできるだろう。アジアは、それ自体ではほとんど曖昧模糊なレッテルであるが、今や世界中で最も高い人口を誇る集団であり、経済は熱狂的なまでに急騰し、グローバルな地位へと成長を遂げつつある、既にあらゆる面で膨張した存在なのである。おそらく、手が届かないように見えていたものをそろそろこの手に引き戻し、等身大の理解へと帰着させるべき時なのだ。

キュレーターの役割は、さまざまな矛盾に満ちている。われわれはアートそのものに語る力があると信じる一方で時折その解説に勤しみ、複雑なものをわかりやすくしようと努力しつつも、図らずして単純なことを複雑化させてしまったり、アートは時に予期しなかったある種の魔法をもたらし得るというのに、作品の支柱となるコンセプトが何であるのかをアーティストに訊いたりする。キュレーターはまるでいしへの占星術師のように、星同士の間に見えない線を描きながら壮大な天体図を描こうとする。実際には、一つ星がそれぞれに十分輝いているにも関わらず。

われわれがキュレーターとして企画している本展に固有の矛盾は、その配役にある。この世代の特徴に違わず、ほとんどのアーティスト（そしてキュレーターたち）は海外で学ぶか働か、いずれかの機会に恵まれてきた。故に本展に集結したのは、西欧圏によっていくらか影響を受けた、もしくは形成されてきた感性の持ち主たちだ。（タイ人の男性がにこやかにドアを押さえてくれる時、私は彼の笑みが古典的な「微笑の国タイ」的なもので、その行為は西欧経験によって得たマナーだと分析するだろうか？）移動性の高い生活というのは、今のわれわれの多くにとっての現実である。今やあらゆるものの輸送も簡単になり、国を越えた数々の経験ができる時代なのである。それが、複数の国や文化にまたがる生活を送る人々を生み出してきた。民族性への言及はアジアの様相を翻訳するための前口上だと考えがちであるが、実際のところ、われわれが例えば「純粋にインド的」な、または「完全にインドネシア的」な人々や作品に出くわすことはめったにない。おそらく既にハイブリッド化された現在の世界において、そのようなものはもはや存在しないのだ。

とはいうものの、国籍、歴史、地理、政治、そしてその他のあらゆる枠組みによって形成される矛盾したアイデンティティのマトリクスからは、誰も逃れられない。われわれは単に名もない人になるわけにはいかない。しかしながら同時に、誰かになるために自分たち自身を単純化すべきではない。往々にしてそうであるように、アジアのアーティストたちは、主流の要に自らを位置づけ、その集合的な「独自性」に焦点を当てることによって、より多くの観客と対面してきた。しかし観光がそうであるように、対外的にあるイメージを巧妙に投影する一オサイズのアイデンティティは、一面的な真実を語るだけでなく安易に消費されかねない。またそれ故に、短期間で飽きられてしまうこともあるだろう。

われわれが何者であるのかという問いは、続いてわれわれが正確にどのような時代、どのような場にいるのかという問いに繋がる。グローバリズムはこの世界を、ひとつのアパートと同じぐらい小さな場所へと変容させ、その全ての部屋にわれわれは自由に入出入りできるようになったようである。見上げれば天井のすぐ下で、なめらかな振り付けで互いの迂回路をつけながら物資をこちらからあちらへと運ぶジャンボジェット機の過密な交通状況が見えるかもしれない。テクノロジーによって閉ざされたこの世界では、全ては奇跡的に調整され、目的地はいつも簡単に届く範囲になったが、われわれは今どこにいて次にどこに向かうのだろうかといった、より簡単な問いがかえって答えにくくなってしまった。

アジア自体もまた、決して十分に知られることのない歴史と、未だ到達していない完璧な未来の間で固着している。現代に無理やり連れ戻された恐竜のように、アジアもまた、現在の中で自らの位置を主張しようと不器用にもがいている不完全な新旧の寄せ集めなのかもしれない。われわれは、アジアの歴史は決して着地点を見出されることがなく、常に歪曲されうることを十分すぎるほど分かっている——事実、教科書は幾度となく上書きされている——そして、押し寄せる経済の波にも関わらず、今日のアジアの地平線は今もなお、忘却のうちに取り残され、あるべき姿と現実の間でどこにも宙吊りにされた、見捨てられた建物の輪郭を写し出している。

上述したように、アジアと「出会う」ことは難しい。なぜならアジアを位置付ける一定の方法がないからである。アジアは現在の多くの混乱と矛盾の狭間にあるのだ。しかし、われわれはまさにこの矛盾の中においてこそ、アジアと出会うことができるのではないだろうか？ アジアは事実、時代と場の両方において永遠に一時的なものであるという、まさにその考えの中にこそ、ある種のリアリティを探求することができるのではないだろうか？

おそらくわれわれがここで選んだアーティストたちは、アジアはこうであると解釈されてきたいくつかのカテゴリーをすり抜けていこう。本展の作品は難解な法則に従うよりも喜びの原理に導かれるものたちだ。説教よりはパロディという手法を選ぶアーティストもいれば、真面目さから逃れる方法で真実の深淵にせまる者もいる。よりオーソドックスな技術をあれこれいじることで、現代的であることが必ずしも派手な手段に従事することを意味するのではないということ、逆説的にわれわれに気づかせてくれるアーティストもいる。例えば、一枚のドローイングがメディアを駆使した作品とは異なるレベルの浸透力を持つこともあり得るだろう。オブジェを基にした作品は物理的な形態があるために即物的であるが、本展のそうした作品は特定の現代的な関心事に由来しているため、単なる静的な物体に留まらない。政治的関心を包含した作品もあるが、その背後にある批判的な意図を理解することは必須ではなく、より重厚な意味合いを知るためのもうひとつの手段に過ぎない。他にも無数の方法で才能を調和させながら軽やかにジャンルの間を行き来する者もいて、時には彼らを単に「アーティスト」という肩書きで総称してしまうのを難しく思うほどだ。本展はアジアと現代美術、それぞれのアイデンティティについての先入観に対する挑戦である。そうすることによって、「現代のアジア美術」とは何かを定義づけるひとつの方法がある、という憶測そのものを覆すことができないだろうか。

われわれの多くは未だにわれわれ自身の文化的感性のクリシエに直面しつづけている。インド人のアーティストは社会政治的な関心事を声高に主張し、インドネシア人のアーティストは多民族国家であるがために常にアイデンティティの探求に勤しみ、タイ人のアーティストは周囲に対してタイらしい感覚を投じる役目を全うしようとしていて、その方策は「コミュニケーティブ」であることと「リレーショナル」であることである。日本人アーティストの感性は身近な興味に没頭することで形成されていて、彼を取り巻く決まり文句はもちろん、アニメ、マンガ、もしくはオタク。アーティストの多くはそのようなアイデンティティのクリシエを生み出すことに未だに駆られているようだが、外部からと同様に自分たち自身によって負わされたこれらの予想を覆すことによるのみ、われわれはアジアの新しい印象を見出すことができるだろう。そしてそれが達成された時、さらに探求を深めるための刺激や説得は不必要となる。結局のところ、出会いとは、それが初めてであれ、二度目であれ、新鮮な印象とひとつの問いから動き出すものなのだ。そう、「どこかでお会いしたことがありますか？」という問いから。

河野晴子 | こうの・はるこ(資生堂ギャラリー学芸員、日本)

(飯田志保子訳)

Dear Asia, Have We Met?

Kohno Haruko

A large white balloon hovers in the air, barely tamed so as not to fly off by a string held in the hand of a young man. He seems a bit indifferent to what he has a grip on, standing in a verdant park on an otherwise normal weekend morning. Next a young family, and then a happy couple do just the same; they stand there, doing their business while the balloon in their hands goes this way and that, restlessly seeking for a chance to steer itself into the sky. Once in a while the balloon twirls around, each time exposing a large question mark that is on the other side of it, imprinted in camouflage pattern. Hues of army olive clearly appear unbecoming against the blue sky, consequently imbuing the question mark with a visual paradox: it is a symbol concealed, prominent because it is disguised.

This video work conveniently sets the tone for my comment on the exhibition "Have We Met?" A collaboration among four Asian curators inviting 14 artists from their respective countries, this exhibition is also in a state of comfortable suspense, for it does not set out to provide definitive answers. Rather, we are about to release a question to initiate dialogue. The question might balloon into further conversation should it succeed in gently making its way into those who set foot in this playground of art. This exhibition will also be something close to a weekend park where individuals do their own preferred thing (and if good meetings do happen, then the time spent would be doubly worthwhile.) There is uncertainty as to where this is headed, but the exhibition should still be uplifting; the message is light enough to be casually carried beyond this place, and across any borders there may be. And, as with any other show, this one also has a way to end; ideally, it should disappear into the yonder, by which time the question itself and the dubiety therein will have been deflated to nil.

To raise the question "have we met?" among the many individuals involved here is somewhat ironical at this point in time, as I write several months prior to the exhibition opening. "Not yet" would be the answer for now; among the participating artists, some of whom even the curators have only "met" through indirect introduction from each other. Audiences will come short of information on what they will see, for we have deliberately chosen young artists who have only had limited exposure till now. The curators don't know just yet whether the works of art will or will not play off each other according to the plan they envisioned.

In fact, to be frank, I think the question might indeed ring true among the curators when they reunite because their meetings have always been intense but brief, casual but entirely work-bound. Admittedly, the memories of being tightly packed together in a van, traveling through mid-summer Delhi amid honking auto rickshaws, past the posters dotting the streets of election-impending Jakarta, and eventually deep in the Bangkok traffic, will have faded to a certain extent when we meet once again in wintry Tokyo where the exhibition will take place. After coming up with a handful of artists that struck a mutual chord in us, we returned to our respective homes and resumed to further dialogue, but only via email — a wonder tool if only it can achieve parity with face-to-face encounters — about how to curate our findings. "Have we (really) met?", we might ask ourselves in refreshing reunion.

That said, I hope I justify myself in saying that, thanks to its simplicity and convenient coyness, this question can be used between strangers and once again between acquaintances, reflecting different ways of approach, from curious contact to reaffirming bonding. By extension, the question seems valid when addressed to the larger context of Asia, which one

might call a collective body of familiar strangers or unfamiliar neighbors, embraced within geographic and cultural commonalities but ironically united with a western lingua franca. Asia, which is almost an obscure label in itself, has already swelled in all aspects, with now the largest population cluster in the world, frenetically erupting economies, and growing global stature. Perhaps it is time we draw back what seems out of reach and come to a life-sized understanding of it.

A curator's role is impregnated with a variety of contradictions: while we believe in letting art speak for itself, we sometimes speak for it; we endeavor to simplify complications but inadvertently complicate simplicities; we ask artists what concept supports their work, when in fact art can bring to life a certain kind of magic unplanned from the onset. Curators are like old astrologists, drawing invisible lines between stars to create a bigger picture when in fact, the shine of a lonestar is bright enough.

The contradiction inherent in the exhibition we are curating is its cast. Not unlikely of this generation, most artists (and curators alike) have been blessed with the opportunity to either study or work abroad, which has thereby brought together individuals whose sensibilities have been to some extent, influenced or molded in the Western bloc. (When a Thai guy smiles and holds the door for me, do I fathom his smile to be classically Thai and his conduct to be a western attainment? Is his kindness divisible as such?) A mobile life is the present reality for many of us; this is an age of easy transport and transnational experiences, which has engendered peoples whose life stretch over multiple nations and cultures. And so, although we tend to think that references to ethnicity are a preamble to interpreting aspects of Asia, the truth is, we rarely come across people and works of art that are for example, "purely Indian" or "wholly Indonesian." Perhaps there are no such things in this already hybridized world.

Still, none of us can escape the matrix of conflicting identities imposed on us by nationality, history, geography, politics and whatever other frameworks there are out there. We simply cannot be a nobody. At the same time however, we should not simplify ourselves to become a somebody. More often than not, Asian artists have attempted to locate themselves in the mainstream picture and towards the larger audience by highlighting their collective "uniqueness." But like tourism, bite-sized identities that neatly project an image to the outside not only speak one-sided truths but can also be easily consumed, and therefore go weary in short time.

The question of who we are is followed by the question of where exactly we are in place and in time. Globalism seems to have made our world as small as an apartment where we can access all rooms inside. If we look up we might see a thick traffic of jumbo jets transporting things from here to there just below the ceiling, as they bypass each other in smooth choreography. Everything is miraculously orchestrated in this technology-bound world and destinations are always easily reachable, but the easier questions are in turn more difficult to answer: where are we now and to where are we headed next?

Asia itself is also fixated between a history that is never fully discovered and a perfect future that hasn't yet arrived. Like dinosaurs forcibly brought back to life into the present, Asia is also an imperfect melange of the old and new, clumsily trying to stake claims in the present. We know all too well that Asia's history has never been fixed but always malleable

— textbooks are written over many times — and despite surging economies, her skyline today is still defined by derelict structures left in limbo, awkwardly suspended between what should have been and what is.

With the above said, to “meet” Asia is difficult because there is no one way to locate her. Asia is suspended in the many confusions and contradictions of the present. But could we not meet her exactly in this contradiction? Could we not seek a certain kind of reality in the very idea that Asia is in fact, in perpetual transience both in time and in place?

Perhaps the artists we have selected here will slip through categories that define what Asia has been expounded to be. Works in this exhibition follow the pleasure principle rather than profound disciplines. Some choose to parody rather than preach. Some artists reveal deeper truths by way of eluding seriousness. Others meddle with more orthodox techniques which conversely opens our eyes to the fact that to be contemporary doesn’t necessarily mean to pursue flashy technicalities. We might learn that a drawing for example, has a different level of permeation than media-based works. Object-based works are instantly appreciated for their physical forms, but those in this exhibition stem from concerns about the particular present and hence they are not static as objects per se. There are works that embrace political concerns, but to know the critical intent behind the work is not an imperative but an option to achieve graver meaning. The rest move suavely between genres, mixing their talents in a myriad of ways, sometimes making it difficult to label them simply as “artists.” This exhibition challenges preconceptions about identities, both of Asia and of contemporary art, and by doing so debunks the assumption that there is a single way of pinning down what “contemporary Asian art” is.

Many of us are still faced with the clichés of our own cultural sensibilities. An Indian artist loudly voices socio-political concerns. An Indonesian artist is constantly tackled by questions of identity because it is a multiethnic country. A Thai artist tries to satisfy the role of projecting a sense of Thai-ness to its surroundings and his tactic is to be “communicative” or “relational.” The sensibilities of a Japanese artist is shaped by his immersion in his small circles of interests, and the buzzwords around him are of course, animation, manga or otaku. Although many artists are still prompted to producing such clichés of identities, it is only by way of subverting these expectations imposed on us by the outside as well as ourselves that we will find new impressions of Asia. And when we do, we need not be provoked or convinced into seeking further; after all, whether it is the first or second encounter, a fresh impression is usually what induces one to ask, “have we met?”

Kohno Haruko (Curator, Shiseido Gallery, Japan)